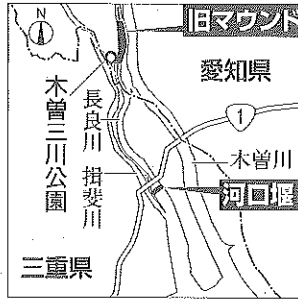


長良川下流 土砂再び堆積

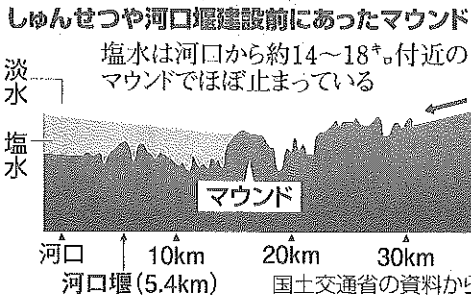
潮止め機能の可能性 京大研究者ら

長良川下流の川底に土砂がたまって盛り上がり、塩水の遡上を止めていた「マウンド」が部分的に再生しつつあることを、京都大の今本博健名誉教授らのチームが確認した。7日、岐阜市で開かれる土木学会中部支部研究発表会で報告する。



水利用と洪水対策を目的に旧水資源開発公団が1988～95年に三重県桑名市の長良川に建設。総事業費は1500億円。水需要は伸びず、利用は開発した毎秒22.5トンのうち3.592トにとどまる。本流にダムのない長良川に人工構造物を造ることに對し、全国的な反対運動が起きた。

河口堰開門議論に一石



国はマウンドを除去して河口堰を建設したが、マウンドの再生は開門議論にも影響しそうだ。国は1971年以降、洪水時も堤防から水があふれないように河口から30キロより下流で川底をしゅんせつしたが、塩水が上りやすくなるため、95年に河口から5.4キロのところに堰を建設。97年までに、河口から14キロ付近にあったマウンドも取り除いた。今本さんは、98年の河

床高と、2011年の河床高を河口から30キロ地点まで比べた。国土交通省のデータは川の横断方向で計測した数値の平均値だが、今本さんは魚群探知機で川底の形状を面的に調べた。その結果、堰のすぐ下流付近が1.32～1.93倍高くなっていて、旧マウンド付近も最大1.3倍以上がっていた。逆に、河口から28キロ付近では1.1倍近くえぐれていた。旧マウンド付近では、右岸(西側)側で幅100メートル、長さ数百メートルにわたり、川底が盛り上がりつつあった。しゅんせつで川の容積が大きくなり、堰で水をせき止めているため流速が落ち、上流からの土砂がたまる「埋め戻し」が起きたとみる。旧マウンドは高さ3メートル後あったが、今回確認できたのはその半分程度の高さ。だが、上流からの淡水は比重が軽く、川の上流を流れ、比重の重い塩水は川

底をはうようにさかのぼるため、新たなマウンドも潮止め機能を発揮する可能性がある」と指摘する。愛知県は大村秀章知事の指示で、今本さんから専門家を委員とし、堰の開門調査を検討してきた。生物豊かな汽水域を復活させたり、アユなどが川を上りやすくなり、取水にも影響する恐れがあるなどとして、国交省や岐阜、三重両県は反

対、または慎重な姿勢だ。今本さんは「(再生した)潮止め機能を利用して河口堰のゲートの開放を検討してはどうか」と話す。国交省中部地方整備局の笹森伸博河川保全管理官は「マウンド付近は川幅が広く、土砂が堆積しやすいが、現状でも想定した洪水の流量は流せる。ゲート開放は塩害の恐れが大きく、のめない」と話した。(伊藤智章)